

# 二戸市浄法寺町

# ふ ど う だ て あ と 不 動 館 跡

## 現地説明会資料

平成23年11月12日(土)

午前10:30~正午



遺跡の所在地	二戸市浄法寺町清水尻11-2ほか
調査の委託者	県北広域振興局土木部二戸土木センター
調査対象面積	7,000㎡
調査期間	平成23年6月16日~11月30日(予定)
調査担当者	小山内透・福島正和・小林弘卓・菅野梢
協力機関	二戸市教育委員会・二戸市埋蔵文化財センター・二戸市役所浄法寺総合支所



(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



## はじめに

今回の不動館跡の発掘調査は、主要地方道二戸五日市線の緊急地方道路整備事業によって遺跡が消滅するため、記録として残すことを目的に行われたものです。これまで同事業に関連して、本遺跡の東側に沢を挟んで隣接する館Ⅱ遺跡(中館)や西側の谷向かいの吉田館跡などの中世城館の調査も行われています。



遺跡周辺の中世城館位置図

### 1. 遺跡の位置と立地

不動館跡は、旧浄法寺町役場(二戸市役所浄法寺総合支所)から東方約0.9kmに位置し、安比川右岸の北側に張り出した海拔198～230mの台地上に立地しています。遺跡は、北側は安比川との標高差約30mの崖、西側は安比川支流の吉田川に形成された谷、東側は館Ⅱ遺跡(中館・陣場館)を隔てる沢、南側は台地を区切る数条の堀で区画防御されています。

安比川を挟んだ西方約1.1kmの台地上には戦国時代の終わりのころ、この地域を支配した浄法寺氏の居城であった浄法寺城が位置しています。

中世の城館跡である本遺跡は、館を造る際に土木工事として高台が削られたり、その縁や低いところに一部土盛りするなどの大規模な造成が行われ、元々の地形からかなり改変されていて、古代や縄文時代の地層や地面はほとんど無くなっていました。

## 2. 発見された遺構

11月4日現在での検出された主な遺構は、ほとんどが中世の館跡に関連すると思われるものです。普請(土木工事)の跡としては、平坦地(曲輪・帯曲輪・腰曲輪など)7箇所、塁壁(土塁・切岸など)5箇所、空堀跡4条、通路状遺構(犬走り)3箇所などがあり、作事(建築工事)の跡としては、竪穴状遺構20棟、土坑類12基などが見つかりました。

### <曲輪・帯曲輪・腰曲輪>

曲輪は竪穴状遺構などが見つかった二重の堀で囲まれた本丸跡、堀で囲まれて位置と規模から三の丸跡と思われる平坦地2箇所があります。三の丸跡は昭和の水田の造成で削られて作事的遺構は無くなっていました。調査区外になりますが、昔は堀に囲まれていた二の丸跡も畑として現在は利用されています。



本丸調査前現況(真上から)

帯曲輪は三の丸西側の斜面上段に幅約5mほどの細長い平坦地として二段見つけましたが、この部分の調査は来年度に残る見込みで、詳細は不明です。



東部中腹帯曲輪調査後(南から)

腰曲輪は本丸東側の斜面中腹と下位には小さな棚のような平坦地として3箇所見つけました。中腹では南北で高低差があり、折り返しとなる犬走りで繋がる腰曲輪二段ともとれる帯曲輪となりました。本丸や三の丸などの広い曲輪は主に居住区として使用され、細長い帯曲輪や棚状の腰曲輪は本丸を守るために斜面に設けられるものですが、特に柵列などの防御的作事関連の遺構はありませんでした。

### < 塁壁・空堀 >

切岸は法面を削って傾斜をきつくして敵が登りにくくした斜面で、本丸東側では堀と組み合わせ高低差約10mと防御効果を高くしていました。

土塁は低い部分が一部盛土されていましたが、元々の地形を掘り残しているものでした。

堀跡はいずれも底の幅が狭くなるV字形の薬研状の空堀跡で、本丸西側の二重堀は上幅も深さも10m以上とかなり大規模なものでした。堀底は雨で削られた雨裂と水性堆積の砂が認められ、慢性的な水流により一定の状態を保つことが困難だったようで、状況からみて度々崩落・流出していたようです。



本丸東側の切岸と空堀(南から)



本丸南側の土塁と空堀(北から)

< 虎口・犬走り >

虎口こぐちは城の出入り口や曲輪への進入口などを指します。不動館の本丸に入る虎口は、二重堀の塁壁が途切れた本丸南側と考えられますが、調査区外のため、門などの施設があったかは不明です。

犬走りは本丸や各種曲輪に登る坂道などの通路で、今回の調査では本丸への虎口付近の本丸南側塁壁(大手?)と東側塁壁(搦め手?)で検出されました。

< 竪穴状遺構 >

作事的遺構は三の丸では50cmさくへい以上も削平されていて遺構は無くなっていました。竪穴状遺構はすべて本丸で見つかったもので、一辺約2.5mのものから約6.5mほどの方形から長方形のものと思われませんが、狭い場所に何度も建て替えたようで、重なりが多く、全体の形は不明なものが多いです。カマドはありませんが、床に炉跡のあるものもありました。柱配置も不明瞭で、形態から竪穴建物跡と断定できるものはなく、時期を特定できる遺物もほとんどありません。



重なり合った本丸の竪穴状遺構群(南から)

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代(晩期)の土器が大コンテナ1箱と磨石などの礫石器が中コンテナ12箱と縄文時代の遺物が1番多く、大半は客土中からの出土でした。竪穴状遺構の埋土にも縄文土器が含まれているものもあることから、地形的に土の堆積が進まず、近代に客土されるまで遺構は埋まりきっていませんでした。



出土した鉄製品

中世の遺物としては、大半が竪穴状遺構から出土したもので、中国産の青磁破片(16C)1点と古瀬戸陶器片(14C)1点と器類は極めて少なく、鉄製品は鉄鏃2点、刀子1点、紡錘車2点、同軸棒・釘などの棒状製品と板状製品などが30点ほどと多く、中国産の中世の古銭も5点(開元通寶・元祐通寶・大観通寶・永樂通寶)と金属製品が比較的多く出土しました。堀底からは石臼の上臼も1点出土しました。

### 4. まとめ

不動館跡は、文献資料や伝承が乏しく、館主の不明な城館です。おそらく館内に不動神社がまつられていることからついた名称と思われます。

今回の調査では、中世の遺物は極めて少なく、遺物から存続時期を特定するには至りませんでした。ただし、優劣が判然としない並列式の曲輪配置となる縄張りのあり方は、東北の中世後期の特有といってもいいものであり、立地形も合わせて見た場合、不動館は隣接する館Ⅱ遺跡(中館・陣場館)と一体的な城館と考えられます。館Ⅱ遺跡の調査成果では概ね16世紀代後半と想定されています。このことから不動館跡も同じ戦国期の地域領主である浄法寺氏の家来が館主であったと思われます。

ところで、16世紀末の天正20年(1592年)には豊臣秀吉の命により南部領内の48城中36城が破却され、この地域を治めていた浄法寺氏の居城も廃城となっていることから、不動館も一緒に破却されたものと思われ、落城した場合と違い遺物が少ないのも頷けるようです。

最後になりましたが、県北広域振興局土木部二戸土木センター、二戸市役所浄法寺総合支所、二戸市教育委員会、二戸市埋蔵文化財センター、地元地権者の方々、直接調査にご協力いただいた作業員の皆様に厚く感謝するとともに、今後とも一層のご協力をお願いいたします。